

二〇二六年度

和歌山信愛高等学校

入学試験

国語 (六〇分 一〇〇点)

受験上の注意

- 一 開始のチャイムが鳴ったら、問題冊子の全てのページがそろっていることを確認して、解答を始めなさい。
  - 二 問題冊子は1ページから24ページまであります。
  - 三 受験番号は、問題用紙と解答用紙の両方に記入しなさい。
  - 四 解答は、すべて解答用紙に記入しなさい。
- 終了のチャイムが鳴ったら、解答をやめなさい。
- 解答用紙は、問題冊子の上に開いたまま裏返して置きなさい。

〈解答は、句読点や記号も一文字分と数えて記入すること〉

受験番号



【問題は次のページから始まります。】

【一】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

神話の中でカラスは、神の遣いであったり、神の聖鳥であったりした。ノアの方船はこぶねにも乗せられ、特別な使命が与えられた。神話の時代は、黒い羽毛にも悪い印象はなく、カラスという生き物のひとつの「個性」として認められていたように見える。しかし、その後は、「凶鳥」と呼ばれたり、悪魔の配下のような扱いをされることがしだいにふえていく。

カラスの「聖」の印象は、①人間にしかできないと思われていたことがあたりまえのようにできたことに加え、未来を予知したような行動が見られたことも大きく影響したように思う。

たとえばカラスは、人間の視線の動きを目で追うことができる。つまり、人間が見ているものがわかる。それによって、人間の次の行動を予測することができた。A 人の心を読んだか、未来を予知したかのように。もちろん、行動と結果の因果関係も理解した。弓矢や銃口がこちらを向いていたとき、狙っているのが自分なのか隣のカラスなのかもわかった。その人間の感情も。

もともとカラスは、仲間どうしで腹を探り合い、ほかのカラスが隠した食べ物をかすめ取るなどしてきた。自分が有利でいられるように、仲間の行動を学習して裏をかくなど、相手の行動を予測したりもした。人間に対しても、それを応用した。そうするだけのメリットがあったからだ。

「魔」に属する印象は、人間の死体を食べるなど、人間が嫌悪・拒否する行動が、ある時期以降、ひんばんに見られたことが大きい。また、「白〓聖」や「白〓善」に対する、「黒〓悪」という a バクゼンとしたイメージに引きずられたせいでもあった。カラスにとってはただの遊びだったことが、人間に大きな被害、損害を招いたこともあり、それを「悪魔の所業」とふれまわる者もいた。

しかし、ワタリガラスも、ミヤマガラスも、ハシボソガラスも、ほかのカラスたちも、人間が地上に満ちるはるかな以前からしてきた生き方を継続しただけで、人間と接したこの数千年間で自身の行動を変えたわけではない。状況に合わせ、本来の行動を上手

くアレンジしただけである。②カラスの行動に本質的な変化はなかった。

食べ物を得るために、カラスは知恵をめぐらす。脳内でイメージをつくり、試行錯誤して目的を達する。ときに人間を観察し、そこから食べ物を得るヒントをつかんだりもした。それはカラスにとって、**B** 自然なことだった。

またカラスは退屈が嫌いで、人間や人間のまわりにいる動物に「ちよっかい」をかけて、相手が返した反応を「娯楽」にしたりもした。人間からすればそれは、見覚えがある、あまりにも人間的な行動に見えた。「鳥なのに、こんなことをするなんて——」と思ったりもしただろう。カラスが鳥の中でも特別な存在であることは、こうした行動からも明らかで、それゆえに「神に愛された存在」と見る目もあった。もちろん、③**当事者**を酷く怒らせることもあったわけだが。

一方で人間は、時代が進む中で人口を増やし、争いの規模を拡大してきた。都市化が進み、人口 **b** ミツトが増えると、人間の集団内での感染症のリスクが拡大した。疫病が蔓延したり、国と国が大規模な戦闘を行うと、必然的に死体が増えることになる。結果、地面にたおれている大量の人間をカラスは見た。

死体は肉である。動物の肉も人間の肉もカラスは区別しない。腐敗する前に食べるのも、カラスにとっては自然なこと。もちろんカラスは遠慮もしない。食べたいときに食べたいものを食べるだけ。カラスには人間のような善悪の意識もない。

それでも基本的に同属は食べない。モラルなどではなく、本能が「ダメ」と告げるために。

そんなカラスたちも、同属の死骸を見つけると、高い場所から見下ろした。仲間のもとに集まる姿は、人間には吊いをしていようにも見えた。また、仲間の亡骸なきがらに向かって鳴く声は、どこか悲しげで、追悼の意が感じられる気もした。そうした姿に対し、「人間的」と感じた者もおそらくいただろう。鳥なのに、人間のように悼いたむ心を持っていると。

④ こういった行為も、古い時代のカラスの「聖」のイメージと結びついたのだろう。

しかし、カラスや野犬など、死んだ人間を食べる動物に対して、恐怖や嫌悪、怒りを感じる人間は多い。死体が蹂躪じゅうりゅうされたと感じ、倫理的に許せないと感じる人もいる。人間の尊厳が侵されているとも思う。

こうした行為をするカラスに対し、「悪魔の所業」と批難した宗教関係者もいた。そうした言葉が人々の心に深く刻まれた結果、カラスに対して「魔の遣い」などといったイメージが刷り込まれることになった。それは西洋の魔女狩りの時代にとくに強まったとも言われている。

日本では、日本人の思想と深く絡み合った仏教が、こうしたカラスの行為を「悪の所業」と考えたことも、カラスを忌避する意識につながっていった。

人を食べる姿を実際に見なかったとしても、カラスの大きな嘴が人間の心に本能的な恐れを呼んだことも事実である。この嘴で突つかれたら大ケガをするかもしれないという想像も、人間の心に恐怖を招いた。

日本において平安時代に都で亡くなった人の遺体の多くは郊外の指定された場所に運ばれ、「風葬」にされた。「野辺送り」は、今でこそ火葬場への見送りや葬式の意味で使われているが、もともとは、葬列を組んで埋葬地まで遺体を運ぶ儀式や、さらに古くは風葬の地まで亡骸を運ぶことを意味した。

京都には現在「鳥辺野」(清水寺南方)や「化野」(嵐山北西)、「蓮台野」(紫野)、「船岡山」(紙屋川の一带)といった「野」のつく地名がいくつかあるが、ここでいう「野」は平安時代に風葬地だったことを意味している。鳥辺野や蓮台野は身分が高い人物向けの地で、より身分の低い者が送られたのが化野とされる。

藤原一族など、とくに身分の高い者は、運ばれた風葬地において火葬されることもあったが、当時、より一般的だったのが土葬であり、土葬する財力もない者は、遺体をそのまま野にさらして、朽ちるのを待った。

それを「風葬」と呼んだが、実際には野犬やカラスが遺体を食べることで骨となった。疫病が広がった際は、こうした風葬地に大量の死体が並び、遠目からもカラスが群がるのが見えたという。

こうしたケイカから、中世から近世にかけて、カラスの印象は日本でも世界でも悪化していった。「カラスが鳴くと死人が出る」などの負の俗信も、多くの国で語られることとなった。

明治時代になると、日本国内で日本と西洋の文化の融合が起こる。キリスト教的視点によるカラスの悪いイメージが伝えられると、そこでも印象の融合が起こり、これまでにないタイプの不吉さもカラスに対して感じるようになった。

⑥ こうした負のイメージが大きく変化したのは、比較的最近のことである。戦争や疫病で野ざらしにされた人間や、それに群がるカラスの姿を見ることは、今や C ない。科学の進歩が夜に対する恐怖を薄め、多くの迷信を消していった。夜中にカラスが鳴いたとしても、それを不吉と感じる人はきわめて少ないだろう。「不吉なカラス」というのは、ホラー映画の中の演出の一部となってしまった感もある。

インターネットが普及し、カラスが遊ぶ姿やカラスの知的な行動が映像として多数公開されたことで、d スガオのカラスにも人々の関心が集まった。それが嫌悪など、古くからあったマイナスの印象を消していった。

逆に今は、カラスに対する好意的な目も増えたと実感する。

春から夏にかけての e 繁殖シーズンに、気の立った親ガラスに威嚇いかくされて少しだけ怖い思いをすることはある。ゴミ置き場で生ゴミをあさられたり、洗濯物のハンガーを盗まれたりすることを「迷惑」と感じることもある。だが、現代においては、それもまた日常の一部となっている。

今、カラスは、ふつうの野鳥の一員として、人間の身近にいる。

(細川 博昭『鳥を読む―文化鳥類学のススメ―』より)

問一 〜〜〜線部 a s e のカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで答えなさい。(漢字は楷書ではっきりと書くこと。)

問二 本文中の A s C に当てはまる言葉として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア あたかも      イ すべての      ウ ほとんど      エ たいした      オ きわめて

問三 ー線部① 「人間にしかできないと思われていたことがあたりまえのようにできたことに加え、未来を予知したような行動が見られた」とありますが、筆者がこのように考える根拠となったカラスの行動として適当なものには○を、適当でないものには×をそれぞれ書きなさい。

- 1 カラスは人間の視線の動きを目で追い、人間の見ているものを知ることができた。
- 2 カラスは、人間の次の行動を予測し、人間の行動と結果との因果関係を理解することができた。
- 3 カラスは、自分を狙っている弓矢や銃にあたることはなく、すべて避けることができた。
- 4 相手の行動を学習して裏をかくなどのカラスの行動は、人間に対してのみ行われた。

問四 ——— 線部② 「カラスの行動に本質的な変化はなかった」とありますが、この部分で筆者はどのようなことを言おうとしていますか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 人間のカラスに対する印象は時代を経て良いものになったが、カラスは人間を敵とみなすようになったということ。
- イ 人間のカラスに対する印象は時代によって変化した。カラスは常に人間に友好的な態度をとっていたということ。
- ウ 人間のカラスに対する印象は時代によって変わったが、カラスの行動原理は時代が変わっても一貫していたということ。
- エ 人間のカラスに対する印象は時代を経て良くなったが、カラスは常に人間に反抗的な態度をとっていたということ。
- オ 人間のカラスに対する印象は時代を経て悪化した。カラスは人間を利用できる存在だとみなし続けたということ。

問五 ——— 線部③ 「当事者」の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 人間や人間のまわりにいる動物にちよっかいをかけて楽しむカラス。
- イ カラスが娯楽のためにちよっかいをかけていた、同じカラスの別の個体。
- ウ カラスの中でも特に賢くて、ほとんど人間に近い行動ができるカラス。
- エ カラスは動物の中でも特別な神に愛された存在だと認識していた人間。
- オ カラスがちよっかいをかけて楽しんでた、人間や人間のまわりにいる動物。

問六 ——線部④「こういった行為も、古い時代のカラスの『聖』のイメージと結びついたのでろう」とありますが、それはなぜですか。「こういった行為」の内容を明らかにして、六十字以内で説明しなさい。

問七 ——線部⑤「カラスに対して『魔の遣い』などといったイメージが刷り込まれることになった」とありますが、この変化について説明したものととして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア カラスは他の動物よりも知能が高いため「神に愛された存在」とされてきたが、都市に住む人間とトラブルを起こすようになり、悪いイメージが定着してしまった。

イ カラスは他の動物にはできないことができる動物として特別な存在だと思われていたが、人間の死体を食べる姿のせいで、不吉なイメージが定着してしまった。

ウ カラスは他の動物とは違って同属の死を悼むことができるため「聖鳥」と思われていたが、実際は同属の死因を観察しているだけだとわかって、ずる賢いイメージがついた。

エ カラスは他の動物にできないことができる動物の中でも人間的な存在だと思われていたが、人間の死体を食べることから、人間よりも強大な存在としてのイメージがついた。

オ カラスは人間に神から遣わされた存在、つまり「聖鳥」として扱われてきたが、近代化によって宗教の力が失われた結果、「死」を連想させるイメージが定着してしまった。

問八 ——— 線部⑥ 「こうした負のイメージが大きく変化した」とありますが、その理由の説明として、**適当でないもの**を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 科学の発展によって夜が恐怖の対象でなくなり、カラスに関する不吉な迷信を信じる人が少なくなったから。
- イ カラスが恐れられていた時代のように、戦争や疫病で多くの人が野ざらしにされることがなくなったから。
- ウ インターネットの普及と技術の発展により、カラスのありのままの姿が多数公開されるようになったから。
- エ ホラー映画などのフィクションの中で、カラスが不吉な存在として取り扱われることがなくなったから。

問九 本文の内容として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア カラスの黒い羽毛は、日本に昔から存在する「黒＝悪」というイメージと結びつけられ、恐怖の対象となっていた。
- イ 明治時代には、もともと日本国内にあったカラスのイメージと、外国から入ってきた新しいカラスのイメージが対立した。
- ウ 日本では、昔から仏教の教えが日本人の思想と深く絡み合っていたため、カラスの神聖なイメージが広まっていた。
- エ 現代の日本においては、日常生活を送る中でカラスの姿を見ることはほとんどなく、カラスのことを知らない人も多い。
- オ 現在の日本では、カラスは「聖」でも「凶」でもない、日常生活にとけ込んだ存在として人々に受け入れられている。

【二】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

翌日、まず二限目の数学で答案用紙の返却があった。46点。平均点は52点。僕にはもう、驚きすらなかった。劣等生の烙印が目の前に突き付けられる。五限目では地理が戻ってきた。答案用紙に書かれているのは、57点。

「平均点は64点」

矢代先生やししろが言った。

よかった、数学も地理も、とりあえず赤点はまぬがれたらしい。ほっとする一方で、※赤点を基準に  している自分に苦笑した。落ちぶれたもんだな、宮原奏斗みやばなかと。

「ちよっと出題量が多かったからな。でも、大学入試はこんなもんじゃないから練習だと思って」

大学入試に向けての練習。そう言われて、あらためてそうだったんだと思う。疑問にも感じなかった。僕は今まで、高校入試に向けて勉強してきて、今度は大学入試に向かっているらしい。大学に入りたいかどうか、よくわからなくなってきた。なんで勉強するんだ？

矢代先生がチョークを取り、背を向ける。1位から3位までの点数だけ、黒板に書かれていく。

1位 97点

2位 96点

3位 88点

名前は公表されない。3位までの本人だけが自分のことだと知るのだ。僕たちにわかるのはただ、そんなすごいヤツがこのクラ

スに在るってことだけ。中学時代の僕は、①あっち側にいたのに。でももう、仕方ない。②僕は不相应な苦しい「狭い世界」を選んでしまったのだ。これから僕は、この立ち位置で過ごしていこう。赤点を取らない程度に、落第しない程度に。そう思ったら、気持ち少し楽になった。バイトでもしようかな。③零田さん、お好み焼き店楽しいって言ってたし、コンビニやハンバーガーショップとかでもよく募集しているし。もつとこう、高校生活をエンジョイするっていうのも、いいんじゃないかな。勉強ができるだけがすべてじゃないんじゃないかな。零田さんみたいな友達がいれば、けっこう楽しく過ごせるかもしれないし、落ちこぼれなら落ちこぼれなりの、のんきな学校生活っていうのも、ありなのかな。

ぼんやりした頭に、矢代先生の声が響く。答案用紙返却の日の授業はどの教科も、答え合わせの時間だ。先生に言われるまま、青いボールペンで正解を書いていく。間違えた答えの余白に、そして、書き込むことさえできなかった空欄に。

授業の終わりがけに、零田さんが教卓に向かった。矢代先生と、何か小声で話している。

「正直なヤツだな」

矢代先生が笑い、赤ペンで何か書き記す。そして黒板に向き直ると、黒板消しとチョークを使って訂正をした。

1位 96点

2位 95点

3位 88点

えっ、と声をもらしそうになった。零田さんはすました顔で席に戻っていく。手には答案用紙を持っていた。すぐにわかった。つまり、2点分のどこかが間違っているのに丸になってしまっていて、それを彼女は正直に申告したのだ。97点から95点へ。僕だけでなく、このクラスの全生徒が理解しただろう。期末テストにおける地理のクラス2位が、零田さんだったこと。

放課後、雫田さんが僕の席までやってきた。

「ブラマン、持ってきてくれた？」

屈託のない、明るい表情。僕は、雫田さんを直視することができなかった。五冊の漫画が入った紙袋を渡す。笑えない。あの公園のときみたいに接することができない。

漫画を受け取りながら、雫田さんがちよつと顔を傾ける。

「あれ？ どうした？」

「……いや」

僕は苦笑いをしながら言った。

「頭よかったんだなと思って」

ぼかんとしている雫田さんに対して、思わず嫌味いやみっぽい言葉が出る。

「95点なんて、すごいじゃん。訂正しないで黙ってれば1位だったのに」

「ああ、そのこと」

さつくりと言われて、むらつと怒りが湧いた。勉強できるくせに、できないふりしてたんだろ？ 僕のことバカにしてたのかよ。

いるよな、そういうヤツ。さも遊んでるふうに見せかけて、相手を油断させて、ちやつかりいい成績取って。おまけに誠実さもアピールしちやつて。④ 抑えきれず、つかかるような口調になってしまう。

「地理、めっちゃ苦手って言ってたじゃないか」

「苦手だよ」

雫田さんは事もなげに言った。

「苦手だから、めっちゃめっちゃ、めっちゃ勉強したんだよ」

雫田さんの目が、僕を射る。そして彼女はこう続けた。

「誰かに勝ちたかったんじゃないやなくて、私が、がんばりたかったんだ」

はっと、胸を打たれた。僕は言葉をなくし、雫田さんを見る。

雫田さんはちらっと目を泳がせ、僕の返事も待たずに「じゃあね」と足早に去ってしまった。⑤ 打たれたままの胸は、じりじりと鈍く痛み、僕はしばらくぼんやりと突っ立っていた。

公園へ向かう足取りは重かった。今の僕に、愚痴<sup>ち</sup>を聞いてくれるような人はいない。せめて※カバヒコのほのぼのした姿に触れたかった。どうかまた頭のいい自分に戻してくれと願を掛けたかった。

会話を続けようとせず、さっさと帰ってしまった雫田さんの後ろ姿が脳裏に焼き付いて離れない。彼女はもう、僕と話す気もないってことなんだろう。あんないやな言い方をしてしまったから当然だ。でも、だって、こんなことって。

釈然としないまま歩いていたら、汗がにじみ出てきた。七月も半ばに入って、今日は特に蒸し暑い。喉が渴いた。ちょうどサンライズ・クリーニングの庇<sup>ひさし</sup>が見えてきて、僕は自動販売機の前に立つ。コイン投入穴に百円玉を二枚入れ、カルピスウォーターのボタンを押した。がたと音がしてペットボトルが受け取り口に落ちてくる。同時に、お釣りが落ちる小気味いい音も軽く響いた。

「……あれ」

カルピスウォーターは百五十円だ。なのに、お釣りを取ろうと返却口に指を入れたら硬貨が二枚あたった。ふたつの五十円玉。前の人を取り忘れていっちゃったんだ。僕はその二枚を手のひらに載せる。ラッキー。そのまま財布に収めてしまえば、誰も気づかない。五十円ぐらいじゃ別に、忘れていった落とし主も困ったり傷ついたりしないだろう。

財布を開けようとして、ふと、雫田さんのことを思い出した。97点から95点への自己申告。言わなければ、絶対わからなかったはずなのに。1位のままでいられたのに。

——誰かに勝ちたかったんじゃないやなくて、私が、がんばりたかったんだ。

「かなわないよなあ……」

⑥ 僕は五十円玉をひとつだけ財布に入れ、もうひとつは手のひらに収めた。空いているほうの手でカルピスウォーターを持ち、ごくごくと飲む。そしてちよつと考えたあと、ガラス張りのドア越しにサンライズ・クリーニングをのぞいた。

ビニールにくるまれた衣服たちにうずもれるようにして、カウンターの向こうにおばあちゃんがひとり、座っていた。銀のかかったような白髪で、気持ちいいくらいいさっぱりしたショートヘアだった。雫田さんの言っていた、カバヒコの腰をなでたらヘルニアが治ったおばあちゃんかもしれない。

僕はドアを開けた。おばあちゃんがふいつと顔を上げる。

「すみません。その自動販売機、前の人のお釣りが残ってたみたいで」

そう言って五十円玉を差し出すと、おばあちゃんは「へえっ！」とすつとんきような声を上げた。そして僕のことを頭のとっぺんから足先までじろじろとねめまわし、五十円玉を受け取るところ言った。

「美冬みふゆちゃんと同じ学校の子？」

「え」

「雫田美冬ちゃん」

おばあちゃんは自分の襟元のあたりにとんとんと指を当てた。僕のシャツについている校章を指しているのだろう。

「あ、ええ。まあ」

「雫田一家は昔からうちの常連さんだから。美冬ちゃん、いい子だよね」

「……………そうですね」

「バイト、忙しくしてるんだろ？」

「そうだと思います」

話が長くなりそう。適当に聞き流して店を出ようとしたら、おばあちゃんが五十円玉を引き出しにしまいながら言った。

「あの子、兄弟姉妹、合わせて六人いるんだよ」

六人？ 思わず目を見開いた。そんなに大家族なのか。

「高校にかかるお金はできるだけ自分で稼ぐって言ってさ、えらいもんだよね。そのせいで成績悪いって言われたくないからって、勉強も必死でね。あの狭い団地でひとり部屋もないのに、よくやってるよ」

殴られたような気分だった。なんだよ、それ。できすぎだろ……。

⑦ いろんな気持ちが混ざり合って、ぐちゃぐちゃになる。雫田さんへの敬意と嫉妬。自分への苛立ちと保身。

店のドアが開き、大きな紙袋を提げた女の人が入ってきた。三つ編みを一本に束ねているその人に「いらっしやい」とおばあちゃんが声を上げた。お客さんだ。僕は黙って店を出る。

「頭脳修復」なんて、軽々しくカバヒコにお願いする気持ちになれなかった。僕はそのまま来た道に戻り、公園に行かずに家に帰った。

家のドアを開けると誰もいなくて、僕は黙って靴を脱いだ。ダイニングテーブルの上にメモ書きがある。

〈カレー、あためため食べてね。冷蔵庫にサラダがあります。〉

そうだ、母さんは今日、友達と観劇に行っているんだ。僕は大きく息をついた。とりあえず今日のところは、母さんとテストの話をしなすむ。

僕は部屋着に着替えると、スマホアプリのバトルゲームに没頭した。戦って戦って戦って、敵を倒して、点数を稼いで。「くそっ」とか「なんだよ!」とか小さく叫びながら、夢中で指を動かした。

すっかり夜になっておなががすいてくるとカレーとサラダを食べ、ソファにもたれた。なんか、疲れちゃったな。楽しいことな

いかなあ。

目を閉じると急に睡魔が襲ってきた。そのまま吸い込まれるように眠りに入り、目を覚ますと父さんがテーブルについているのでびっくりした。父さんが帰ってきたことにまったく気がつかず、二時間ほど熟睡していたらしい。

「あ、おかえり」

「おう。よく寝てたな」

気がつけば僕の肩に綿毛布が被<sup>かぶ</sup>さっている。父さんがかけてくれたのだ。

「晩飯はもう、食べたのか？」

「うん。父さんは」

「食べた食べた」

椅子に座っている父さんは、背中を丸めて目を凝らしながら、テーブルの上で手作業をしていた。僕はソファから下りて近づいていく。父さんの手元を見ると、鳥やリスやらの形をしたプレートに、細い油性ペンで何か書き込んでいた。

「なに、これ」

「可愛いだろ。百円ショップで見つけたんだ。ガーデニング用のネームプレート」

嬉<sup>うれ</sup>しそうに父さんは答えた。百日草。ベゴニア。デュランタ。プレートに書き込まれているのは植物の名前らしい。どんな花か、僕にはイメージもできないけど。

そのまま自分の部屋に引っ込んでしまうのも気がひけて、僕はテレビのリモコンを手取る。父さんも好きなバラエティがやっていて、僕はソファに戻ってそれを見た。大御所タレントが司会をしているトーク番組だ。若手の芸人が一生懸命、自分の体験談を語っている。

「うちにパキラっていう観葉植物があるんですけど、僕の言葉がわかるんですよ！ あっち側に伸びろって言うと、ちゃんとそっ

ちに向かって枝が伸びるんですよ！ えらいなあ、すごいなあって褒めてやると、なんかもう、葉っぱがツヤツヤしちゃって」

司会の大御所タレントが「おまえより賢いなあ」とツツコミを入れる。それを見て父さんが「はは」と小さく笑った。

僕は訊ねた。

「父さんは、こういうことしないの？」

「こういうことって？」

「植物にきれいだねとか褒めてると成長がいいって、よく聞くじゃん。褒めないの？」

暗に、かねてからの疑問を投げたようなところがあつた。父さんはいつも優しい。でも、褒めてくれることはほとんどない。それがずっと、不思議で不安だった。本当の本当は、冷たい人なのかもしれない。

父さんはちよつとかぶりを振る。

「父さんはしないよ。そんなこと」

やっぱり。こんなに可愛がつているように見える植物にさえ、そういう気持ちが起こらないのか。僕はあたりさわりなく「まあ、花に耳なんてないもんね」と言い、テレビ画面を見た。深追いをして自分が傷つくのもいやだった。

すると父さんはちよつと間を置いて答えた。

「いや、植物に言葉なんかわかるわけじゃないって疑ってるわけじゃなくて、逆なんだ。本当に通じると思うんだよね。だから、言葉には責任がある」

僕はテレビ画面から父さんへと顔を向ける。父さんは鳥の形のプレートを手に取りながら続けた。

「褒められたくてがんばるって、それも悪いことじゃないんだけどな。それだけを目標にしていると、褒められなかったときにくじけちゃうだろ」

ドキリと胸が鳴った。

今度は父さんが、⑧ 暗に回答してきたような気がした。

父さんは穏やかに、でも力強く言った。

「ただ褒めてもらえなかったって、それだけのことなのに。誰が何を言ったって、何も言わなかったって、懸命に咲こうとしているその姿には、なんの変わりもないのにさ」

そして僕のほうをしっかりと見て、父さんはほほえむ。

「だから父さんは、ただ愛するんだ。それだけ」

そうして父さんは話すのをやめ、プレートに植物の名を書き込む作業に戻った。⑨ 涙ぐみそうになって、僕はソファに置かれたままの綿毛布を握りしめた。父さんの愛情は、まさにこの物言わぬ綿毛布だった。

(青山 美智子『リカバリー・カバヒコ』より)

注 ※ 赤点：落第点。

※ カバヒコ：「僕」の住む町の公園にあるカバの遊具。自分の治したい部分と同じ部分を触ると回復するという噂がある。

問一 本文中の X に当てはまる四字熟語として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 起死回生      イ 意気消沈      ウ 一喜一憂      エ 七転八倒

問二 ――線部①「あっち側にいた」とは、どういふことですか。説明しなさい。

問三 ――線部②「僕は不相応な苦しい『狭い世界』を選んでしまった」とは、「僕」のどのような状況を表現したものでですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 赤点を取らないことを意識しながらも、実際には勉強よりも遊びを優先してしまっており、自分の至らなさや努力不足を自覚している状況。

イ 成績優秀な生徒が集まる環境の中で努力を続けてはいるものの、思うように成果が出ず、達成感を得られないまま不満だけを募らせている状況。

ウ 周囲の優秀な生徒の存在に圧倒され、次第に自分の能力を過小評価してしまい、本来持っている可能性を信じられなくなっている状況。

エ 周囲の期待に応えようという思いにとらわれて、必要以上に自分を追い込み、勉強への重圧に耐えられずに窮屈さを感じている状況。

オ 自分の実力に見合わない学力の高い環境で、成績上位者との比較で引け目を感じながら、赤点を回避することを目標にしてしまっている状況。

問四 ―― 線部③ 「雫田さんみたいな友達」とありますが、このとき「僕」は「雫田さん」をどのような友達だと思っ  
ていますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 明るく振る舞って周囲の人気を集め、クラスを中心にしているような友達。

イ 勉強熱心で、大学入試を強く意識しながら努力を続けている友達。

ウ ともに落ちこぼれではあるが、一緒に気楽な高校生活を楽しめる友達。

エ どんなきも率直にものを言い、正直さを何よりも大切にする友達。

オ 部活動やアルバイトなど学校外のことも共有できる、話題の豊富な友達。

問五 ―― 線部④ 「抑えきれず、つかかかるといふような口調になってしまう」とありますが、それはなぜだと考えられますか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア クラスの人気者としてみんなに注目されている雫田さんの姿に圧倒され、焦る気持ちが一気に押し寄せたから。

イ 雫田さんの態度がうやうやしく、自分を拒絶しているように感じたため、思わず動揺してしまったから。

ウ 何も気に止めていない雫田さんの態度がどこか鼻にかけているように感じられ、その傲慢さに憤りを覚えたから。

エ 苦手だと話していた教科で高得点を取った雫田さんに裏切られたように感じ、自分の劣等感が刺激されたから。

オ 採点の誤りを申告した雫田さんが、自身の優秀さや誠実さをクラス全員に誇示しているように気が障さわったから。

問六 —— 線部⑤ 「打たれたままの胸はじりじりと鈍く痛み、僕はしばらくぼんやりと突っ立っていた」とありますが、このときの「僕」の心情の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 感情に振り回されてしまい、雫田さんの純粋な努力に目を向けられなかった自分の未熟さを痛感している。
- イ 自分ももっと本気で努力していれば雫田さんに勝てたのではないかと、激しい後悔に襲われている。
- ウ 他者と比較することなく黙々と努力を続ける雫田さんがあまりにも尊く、遠い存在に感じてしまっている。
- エ 雫田さんがその場を去ってしまったことに動揺し、せつかくの友情が壊れてしまったと途方に暮れている。
- オ 優越感に浸っている雫田さんに見下されたような気がして、屈辱感とみじめさに打ちのめされている。

問七 —— 線部⑥ 「僕は五十円玉をひとつだけ財布に入れ、もうひとつは手のひらに収めた」とありますが、それはなぜですか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア たとえ少額であっても、誰かの忘れ物であるお釣りを自分のものにするに罪悪感を抱いたから。
- イ 雫田さんの誠実な態度を思い出し、自分が正しいと思える行動を選びたいという気持ちが湧いたから。
- ウ 忘れ物の五十円を正直に届け出すことで、誠実な人だと周りから評価してもらえと思ったから。
- エ 自分のお釣りと他人の忘れ物を分けることで、自分なりに正直さを示した気持ちになりたかったから。
- オ 他人のお釣りを盗んでしまったことが雫田さんに知られると、いよいよ軽蔑されてしまうと思ったから。

問八 —— 線部⑦ 「いろんな気持ちで混ざり合って、ぐちゃぐちゃになる」とありますが、「いろんな気持ち」の内容として**適当でないもの**を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 雫田さんが厳しい家庭環境の中で必死に勉強を続けていることを知り、その真剣さに心を打たれている。
- イ 雫田さんが周囲の注目を集めることで、自分がさらに置き去りにされるように感じ、孤独感にとらわれている。
- ウ 陰ながら努力を続ける雫田さんの話を聞き、自分の怠け心が情けなくなり、腹立たしさを感じている。
- エ 自分が努力していないという事実を突きつけられたものの、素直に認められず、そこから目を背けたくなっている。
- オ 家計を支えながら学業でも成果を出す雫田さんの存在がまぶしく、自分との違いに妬ましさを感じている。

問九 —— 線部⑧ 「暗に回答してきたような気がした」とありますが、これは「僕」のどのような疑問に対する回答ですか。説明しなさい。

問十 ――線部⑨「涙ぐみそうになって」とありますが、それはなぜですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「言葉には責任がある」と語る父の真剣な姿を目の当たりにし、自分では到底たどり着けない人生の深い考え方を示され、強い感銘を受けたから。

イ 父が「褒められなくても花は咲く」という言葉で努力の意味を語ったことで、これまでの自分の行動も無駄ではないと気づき、安心感に包まれたから。

ウ 眠る自分に綿毛布をかけてくれていた父の行動と、「ただ愛するんだ」という言葉によって、普段は表に出さない父の深い愛情に気づき、それを重荷に感じてしまったから。

エ 雫田さんと比較されて苦しんでいたが、父の「誰が何を言ったって、なんの変わりもない」という言葉によって、比べられる苦しみから解放されたと感じたから。

オ 父の「懸命に咲こうとしているその姿には、なんの変わりもない」という言葉を聞き、結果や評価に左右されずに自分の存在を認めてもらっていると感じ、胸が熱くなったから。

【三】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

京にて猫を失へる男あり。 ※ 厨子小路にいたり、身の細るまで尋ねれば、あるところにて見つけ、「これはわが猫」と言ふ。亭主出でて「そちがといふ証は」と言ふ。されば、<sup>あかし</sup>① 男も「なんぢが猫といふ証は」とぞ。惜しく欲しくの争ひなれば、<sup>あ</sup>② 是非、<sup>あかし</sup> a つひに分かたず。

板倉伊賀守、是非の相手二人対座させ、くだんの猫を座敷の中に <sup>すゑ</sup> b、「おのおの手に鰹を一ふしづつ持ちて呼べ。生まれてより育て馴れたる方へこそ行くべけれ」と。猫、はじめ亭主のもとに行くに、喜びて <sup>かつかお</sup> c 抱かむとするもあへず。男のもとへ来るに、撫でむとて手をさしのぶれば、身をすりて寄り来て、男の持てる鰹を食む。やがて  の膝の上へ、ねうねうと鳴きて行きしことよ。

(『醒睡笑』より)

注 ※ 厨子小路：路地や小道。

問一 〜〜線部 a 「つひに」、b 「すゑ」、c 「抱かむ」を現代仮名遣いに直し、すべてひらがなで答えなさい。

問二 〜〜線部① 「男も『なんぢが猫といふ証は』とぞ」は「とぞ」の後に続く言葉が省略されています。省略されている言葉を補いながら、わかりやすく現代語訳しなさい。

問三 ー線部②「是非」とは「どちらが正しいか」という意味ですが、板倉伊賀守はこの「是非」を判断するために、どのような方法を提案しましたか。本文に即して説明しなさい。

問四 本文中の  に当てはまる言葉を本文中から抜き出して答えなさい。

問五 猫を大事に思っていたことがわかる「男」の行動を本文中から十字で抜き出しなさい。





受験番号

【一】

問一	a
	漠然
	b
	密度
	c
	経過
	d
	素顔
	e
	はんしよく

問二

A
ア
B
オ
C
ウ

問三

1
○
2
○
3
×
4
×

問四

ウ
---

問五

オ
---

問六

同	属	の	死	骸	の	も	と	に	集	ま	っ	た	り	、	仲	間	の	亡	骸
に	向	か	っ	て	鳴	い	た	り	す	る	カ	ラ	ス	の	行	為	が	、	人
間	の	よ	う	に	仲	間	を	悼	む	心	を	感	じ	さ	せ	る	か	ら	。

7点

問七

イ
---

問八

エ
---

問九

オ
---

【二】

問一

ウ
---

問二

成績優秀であったということ。
----------------

問三

オ
---

問四

ウ
---

問五

エ
---

問六

ア
---

問七

イ
---

問八

イ
---

問九

どうして父さんは自分のことを褒めてくれないのかということ。
-------------------------------

問十

オ
---

【三】

問一

a
ついに
b
すえ
c
いだかん

問二

男も「あなたの猫という証拠は」と言う。
---------------------

問三

二人の男に鰹を持たせて猫を呼ぶという方法。
-----------------------

問四

男
---

問五

身
の
細
る
ま
で
尋
ぬ
れ
ば

--



2026（令和8）年度入試

## 国語出典

和歌山信愛中学校・高等学校

### 中学A日程（午前）

説明文 『牛乳から世界がかわる—酪農家になりたい君へ』

（小林国之 著 農山漁村文化協会 2024）

小説 『小学五年生』

（重松清 著 文藝春秋 2007）

### 中学A日程（午後）

作文 『仕事も人生もうまくいく整える力』

（柘野俊明 著 三笠書房 2022）

### 中学B日程

説明文 『ミジンコはすごい！』

（花里孝幸 著 岩波ジュニア新書 2006）

小説 『8分音符のプレリュード』

（松本祐子 著 小峰書店 2008）

中学C日程

作文『』

( 著 2011 )

高等学校

評 論 『鳥を読むー文化鳥類学のススメ』

( 細川博昭 著 2023)

小 説 『リカバリー・カバヒコ』

( 青山美智子著 2023)

古 文 『醒睡笑』